

## 閉会挨拶

【竹内】 それでは、最後に、閉会のご挨拶を金森先生からお願いたします。

【金森】 我々全員がここで数時間議論したことから十分におわかりだと思いますが、今日は非常に原理的なことと個別事例の両方ともが取りあげられ、話題が多岐にわたっておりました。

アメリカ型のいわゆるバイオ・エシックス、いわゆる生命倫理は、誕生からまだ三、四十年しか経っていないにもかかわらず、半ば形式化した、官僚化した手続き論になりつつあります。そういう現実を踏まえながらそれよりもはるかに広い複雑な観点から死と生に関する考察を進めなくてはいけないということを、今日あらためて実感しました。

最後に、先ほど李先生と竹内先生がお話しになったことを再度確認して申しあげたいと思います。科学的な知見によって客観的な事実がどんどん出てきて、それによって生命観や世界観もさまざまに変わりつつあるわ

けですが、それを踏まえつつも、それだけでは終わらないと言いますか、それだけでは済まないところの切り込み方のようなものが、確実に存在するわけです。その意味でも、この死生学という学問は、人間世界における固有の機能を持っているんじゃないかというふうに考えています。

一つ残念だったのは、もう少し全体討論の時間が長く取れば、みなさんとさらにいろいろな議論ができたのではないかと、ということです。今日は本当に素晴らしい会議に参加させていただいて、我々一同、感謝しております。ありがとうございます。（拍手）

【竹内】 それでは、以上をもちまして、日韓国際研究会議「東アジアの死生学へ」を終わりたいと思います。どうも、ありがとうございます。（拍手）